

[連載]第34回 清々しき人々 月尾嘉男 (東京大学名誉教授・工学博士)

日本の近代をデザインした 後藤新平



後藤新平(1857-1929)

江戸の名残のある 東京

江戸の市街には八代将軍が散策できる公園は一般庶民が徳川吉宗が整備した飛鳥山公園以外には寛永寺境内、増上寺境内、浅草寺境内などを筆頭に地域ごとの神社の境内程度しかありませんでした。江戸の構造を継承した東京にも最初の洋式庭園の日比谷公園が明治後期に実現しましたが、それ以外に都市公園はほとんど存在しませんでした。ところがある時期から、隅田公園、錦糸公園などが下町といわれる地域に次々と実現しました。

徒歩を唯一の移動手段としていた江戸の街路を継承した東京の道路は、明治初期に急速整備された銀座の煉瓦街以外には曲折した小路の連続でした。ところがある時期から、複雑な街路を整理して靖国通り、昭和通り、永代通りなどの大通りが整備されました。ある時期とは関東大震災が発生した一九二三年、その計画を構想したのは明治から昭和にかけて様々な分野で活躍し、日本の近代をデザインしたといわれる後藤新平です。

順風から逆風 そして順風

後藤は江戸末期の安政四年(一八五七)に奥州水沢の城下で仙台湾守氏の家臣後藤実崇と利恵の長男として誕生しました。水沢は戊辰戦争で会津に味方したため朝敵となり、明治になると勝利した官軍の人々が主要な役職に就任し、後藤は困難な立場になりました。しかし、胆沢県大参事に赴任した肥後細川藩士の安場保和(図1)は福井藩主松平春嶽の政治顧問であった横井小楠の門人であり、人間を見極めることのできる人物でした。

その安場に選抜されて給仕になったのが弱冠一二歳の後藤でした。安場は後藤の才能を見込んで、同行してきた阿川光裕に指示して後藤を上京させます。安場は一八七二年に日本を出発した岩倉使節団の一員として帰米を視察しますが、七三年に帰国した直後に福島県令として赴任したときに後藤を出仕させ、須賀川医学校に入学させて医学を習得させました。後藤は一七歳で二年で医師になりました。その恩人の安場が愛知県令として移動した翌年の一八七六年に後藤も愛知県医学校に移動。さらに翌年には試験に合格して開業免許も取得し、大阪陸軍臨時病院で勤務したため軍医の資格も獲得しています。これらの業績から一八八一年には愛知県医学校の校長と病院の院長を兼務します。わずか二四歳のときです。その翌年に岐阜で板垣退助が暴漢に襲撃されますが、戊辰戦争では敵方であった板垣を治療し、世間でも有名な医者になりました。



図1 安場保和(1835-1899)



図2 台湾総督府

その時期の活躍が評価されて内務省衛生局長に赴任することになり、三三歳になった一八九〇年に自費でドイツへ留学して細菌の研究で、後年、ノーベル生理学医学賞を受賞するR・コッホに師事し、ミュンヘン大学で医学博士となった帰国しました。直後に衛生局長に抜擢され伝染病研究所を設立し行政分野でも手腕を発揮します。現在より平均寿命が短命な時代とはいへ、三五歳で本省の局長になるということは後藤の能力を証明しています。

さらに札幌農学校教授を退官していた同郷の新渡戸稲造を殖産局長に招聘し、その尽力によって台湾の製糖は一大産業に飛躍します。

政府の中核で活躍

この順風満帆であった後藤が挫折する事件が勃発します。福島浜通りの旧相馬中村藩の藩主であった相馬誠胤が家督を詐取された事件に関与して一八九三年に逮捕され、半年も投獄されてしまったのです。最後は無罪となりませんが、これによって衛生局長を失職してしまいます。しかし大阪陸軍臨時病院の院長で上司であり、その時期には野戦病院衛生長官となっていた石黒忠憲の推荐で日清戦争から帰還した兵士の検疫のため広島に赴任します。

この検疫の手際は検疫部長の児玉源太郎に評価され、児玉が日清戦争の勝利で清国から取得した台湾の四代総督になった一八九八年、後藤は台湾総督府民政局長に抜擢されます(図2)。ほとんど社会基盤が整備されていなかった台湾に、後藤は上下水道、交通施設、港湾施設、郵便制度、通信手段の整備に活躍

Advertisement for books '清々しき人々' and '大学の問題' by Goto Shinpei, published by Shinkwa Shoten.

図3 大連の中心広場



図4 市政会館



図5 浜町公園



降間でした。翌年七月に郷里に凱旋したときには地元の人々が仙台の駅頭に出迎え、大祝賀会が開催されるほどでした。

後藤は台湾と満州での鉄道建設の経験から、国内の鉄道の大軌への変更を主張しますが、新線建設を優先すべきという意見が多数で実現できませんでした。一九一六年に成立した寺内内閣でも内務大臣と鉄道院総裁を兼務して、大軌に改築することを閣議決定し、実験も実施しましたが、このときも時期尚早で実現しませんでした。結局、日本の大軌鉄道は四八年後の一九六四年に開通した東海道新幹線のように早く実現しました。

一九一四年からヨーロッパが二手に分裂して対峙する第一次世界大戦が勃発し、日本はフランスとイギリスを中心とする連合国側の一員として参戦し、初期には南太平洋でドイツが占領していた島々を攻撃する程度でしたが、一九一七年にロシア革命が発生したため、その日本への波及阻止を名目としてシベリアに出兵します。後藤は外務大臣として奔走しますが、米価の急騰による暴動により寺内内閣が崩壊し、後藤も下野することになりました。

東京市長として長期計画策定

この機会を利用して、後藤は一九一九年三月に九月月間にもなる長期の欧米視察に出発しました。後藤の視察を証明するかのようには横浜の埠頭には約五〇〇〇人の人々が見送りに集まりました。この時期に後藤は拓殖大学の学長に就任していましたが、この前身は一九〇〇年に設立された台湾協会学校で、後藤が台湾総督府に在籍していた時期に様々な支援していた関係で学長を依頼されたのですが、死亡する一九二九年まで就任していません。

欧米視察から帰国した後藤に依頼された役割が東京市長でした。この時期は第一次世界大戦終了後で大戦景気といわれるバブル経済の盛期で、明治政府が目指した農業社会から工業社会への移行が急速に実現し、全国から東京、中京、阪神工業地帯などへ人口が集中してきていました。その影響で格差が拡大するのと同時に、物価高騰で社会が雑然としている状態であったため、同郷の総理大臣の原敬から混乱した東京の再生を依頼されたの

です。

そこで後藤は台湾や満州で実施したように、組織の刷新を実行するともに、東京の長期計画「東京市政要綱」として「八億円計画」を策定します。当時の国家予算が一億五千万程度でしたから、まさに大風呂敷でしたが東京の将来を明示する内容でした。さらに今後も計画を継続するために独立の調査研究機関が必要だとの判断で、ニューヨーク市政調査会の所長であったC・ピアードを顧問とし、一九二二年に東京市政調査会を設立しました。

ところが市政会館(図4)の建設資金の寄付を依頼していた安田財閥の安田善次郎が九月に暗殺され、後藤を東京市長に任命した原敬が一月に刺殺される事件が連続し、さらに成立したばかりのソビエト連邦の中国大使A・ヨッフフェを日本に招致して会談したことを非難する暴漢が翌年二月に後藤の自宅に乱入したことが続発し、後藤は四月に東京市長を辞任しました。その直後の一九二三年九月一日に襲来したのが関東大震災でした。

東京再生の基本を策定

震災発生の日、第二次山本権兵衛内閣が成立し、後藤は内務大臣に任命され、月末には帝都復興院総裁も兼務することに なります。すでに東京市長として東京改造計画を策定しており、豊富な人脈、組織を指揮する能力などを駆使して帝都復興院を指揮しますが、その復興計画の予算が当時の国家予算に匹敵する一三億円にもなったため財界から猛烈な反対があり、議会で承認された予算は半額以下の五億七五〇〇万円でした。

そのような最中の年末に皇太子摂政宮裕仁親王(後の昭和天皇)の無政府主義者による狙撃事件が発生し、山本内閣が解散することにも後藤も退場することになりました。その結果、当初の帝都計画は実現されませんでした。冒頭に紹介したように、南北の幹線の昭和通り、東西の幹線の靖国通り、環状の明治通りなど、現在の東京の道路の骨格は実現し、震災の被害が甚大であった隅田川沿いに計画された都市公園なども実現しました(図5)。

翌年の一九二四年九月には東京市会において市長に推挙されますが辞退し、翌月に日本で最初の放送局となる東京放送局の総裁に就任します。翌年三月の試験放送の初日に、後藤は無線放送についての抱負を自身で放送し、文化の機会均等、家庭生活の革新、教育の機会提供、経済機会の発展を放送の役割として見通したとともに、現在の放送がその役割を実現しているか反省すべき重要な提言でした。

それ以後は日独協会会長に就任、ソビエト連邦を訪問してスターリンと会談など、国際関係

において活躍しますが、一九二九年四月に列車で移動の最中に脳溢血により京都の病院で逝きました。葬儀のとき財産がほとんどないことが判明し、家族が驚嘆したという人物でした。明治維新以来の激動の時期に多数の逸材が活躍して日本は大国に発展してきますが、後藤は明治初期から昭和初期までの日本を背負った一人でした。



つぎお よしお

1942年生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002、03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリースキーをしながら、知床半島、羊蹄山麓、釧路湿原、白馬仰山、宮川清流、瀬戸内海などを中心に、主宰し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に「日本百年の転換戦略」(講談社)、「縮小文明の展望」(東京大学出版会)、「地球共生」(講談社)、「地球の救い方」(水の話)(遊行者)、「100年先を読む」(モラロジー研究所)、「先住民の敬智」(遊行者)、「誰も言わなかった一本当は恐いビッグデータとサイバー戦争のカタクリ」(アスコム)、「日本が世界地図から消滅しないための戦略」(致知出版社)、「幸福実感社会への転換」(モラロジー研究所)、「転換日本地域創成の展望」(東京大学出版会)など。最新刊は「清々しき人々」(遊行者)。

月刊新聞『MORGEN』を定期購読しませんか？

MORGENは先生と生徒が共有する、読書を柱とした新聞です。生徒会担当教諭、図書館担当教諭、進路指導担当教諭を通して学校に配布しています。読書や社会情報を通し、子どもたちの視野を広げ、みずから社会の一員である自覚と、ものごとを客観的に見、聞き、考える目と心を育てることを目的としています。

- 媒体種別：月刊紙(毎月1回発行 ※7・8月は合併号) タブロイド判 12~20ページ
- 読者対象：中・高・大・専門学校生、小・中・高校教諭

全国の中学・高校、図書館・青少年センターなどの諸施設
大学・短大・専門学校・サポート校、個人購読者など、
教育現場や公共施設などで活用されています

購読費(年間購読)

年度途中の申込可、送料込

300円×11回×消費税
年間11回発行 7・8月は合併号

3,300円(税別)

*一部売りは500円(税別)

*購読費を県費でお支払いいただいている学校さんもあります。県への依頼送付書などはこちらでご用意できますので、ぜひご相談下さい。